

# 張令儀の家庭と文學

——清代の桐城女性作家にみる「才女」と「賢婦」の葛藤——

喬 玉 鈺

## はじめに

アメリカの學者スーザン・マン (Susan Mann) 氏は、清代における女性作家の總數の七十パーセント以上は、長江下流域、すなわち常州から錢塘にかけての中心地區とその周邊の紹興・揚州 (江都)・南京 (江寧)・桐城・新安 (休寧) の五つの衛星區域を含む地域に分布する、と述べている<sup>①</sup>。しかし、これまでの明清女性作家研究は、殆ど隨園女弟子のような男性文人に師事する女性詩人や、男裝して男性文人や妓女と詩酒を楽しんだ吳藻 (一七九〇—一八六二) などの奔放な才女に注目したもので、地域でいえば、江蘇・浙江に限られている。しかも、この地域で女性の詩社活動が盛んだったことや、「閨房」の枠を超えて男性文人と唱和したことを例にあげて、この時代の女性作家の自由な氣風を強調しがちである。

これと對照的なのが、安徽である。この地域は一般的に保守的というイメージが強い。新安は、「節婦」を顯彰するために建てられた「貞節牌坊」の多さで知られており、桐城は、上掲のスーザン・マン氏が「朱熹の理學の書院の所在地であり、家法が極めて重視された。書院の主

要な代表者の一人である方苞は、婦女に對する觀念が特に保守的なことで廣く知られている」と指摘するような土地柄である。女性文學についていえば、民國の謝無量の『中國婦女文學史』と梁乙眞の『中國婦女文學史綱』とが、桐城の代表的な女性作家として「方氏三姉妹」<sup>②</sup> (夫に殉じた方孟式と夫の死後貞節を守って孀居した方維儀・方維則) を顯彰したこともあつて、桐城の女性作家たちは、常に「節婦」「烈婦」のイメージが先行し、今日に至るまで作品を中心とした研究はほとんどない。

一方、近年の江蘇・浙江地方の女性文學研究は、中國近代知識人の「女性」被抑壓者」という單一的な視點に反發するあまり、この時代の自由で先進的な新氣風と女性の自立精神を強調しすぎる面が見られる。しかし、隨園女弟子や吳藻といった特殊な例は、明清時代の女性作家全體を代表するといえるだろうか。また、桐城のような「節婦」「烈婦」のイメージが強い地域の女性作家が、封建女徳に盲従するばかりであったかどうかについても、再考の餘地があろう。

本稿でとりあげる桐城の女性作家張令儀 (一六六八—一七五二) は、一千五百首近くの詩、八十九首の詞、十四篇の文、十八萬字に及ぶ大

部の童蒙書『錦囊冰鑑』が今に傳わっており、さらに戯曲『乾坤圈』(佚)『夢覺關』(佚)を創作したこともわかっている。作品の量やジャンルの廣さからいっても、桐城のみならず、明清時代の女性作家全體の中でも注目すべき存在であるが、今に至るまで彼女に關する専門研究はほとんどない。本稿は、張令儀の作品を通して、清代の女性作家における「才女」と「賢婦」の葛藤を考察するものである。そして、これまで一面的に、先進的とされてきた江蘇・浙江の「才女」の文化、或いは保守的とされてきた安徽の「節婦」の文化という圖式を再検討する一助としたい。

### 一、張令儀の生涯と著作

張令儀は字を柔嘉、號を蠹窗主人といい、康熙朝の宰相張英(一六三七～一七〇八)の三女であり、後に同じく宰相となつた張廷玉(一六七二～一七五五)の姉にあたる。舅の姚文熊(一六四〇～一六九〇)は、康熙六年(一六六七)の進士で、甘肅階州や直隸州の知州、浙江蕭山縣の知縣を歴任した。母の姚氏(一六四〇～一七〇八)と姑の左如芬(一六四三～一六七五)も詩人であり、現在姚氏の詩集『含章閣偶然草』は北京圖書館に、左氏の詩集『纏芷閣遺稿』は南京圖書館に藏されている。張令儀の夫の姚士封(一六七〇～一七二〇)は、字を玉筍、號を湘門といい、姚文熊の三男である。張令儀との間には五人の息子をもうけたが、成人したのは姚孔鑾(一六九二～一七四二)と姚鉉(一七〇五～一七七三)の二人だけである。

まず、論者が整理した略年譜によつて張令儀の生涯を見ておきたい。<sup>6)</sup>

一六六八 一歳 十一月十一日に誕生。

- |      |      |                                                                                                                |
|------|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 一六七八 | 一歳   | 十一月十一日に誕生。                                                                                                     |
| 一六七二 | 五歳   | 父の張英に隨つて北京に行く。                                                                                                 |
| 一六七八 | 二十一歳 | 弟の張廷玉 京師に誕生。                                                                                                   |
| 一六九〇 | 二十三歳 | 同郷の姚士封に嫁ぐ。                                                                                                     |
| 一六九二 | 二十五歳 | 桐城の棠花館に住む。諸弟と共に詩文創作に勵む。                                                                                        |
| 一七〇二 | 三十五歳 | 父の張英が退官し、桐城に歸郷。                                                                                                |
| 一七〇四 | 三十七歳 | 父より屋敷を贈られる。                                                                                                    |
| 一七〇五 | 三十八歳 | 次男の姚鉉 誕生。八月、「蠹窗小記」を作る。                                                                                         |
| 一七〇八 | 四十一歳 | 七月、母の姚氏 病没。九月、父の張英 病没。                                                                                         |
| 一七一  | 四十四歳 | 風雨により家屋が倒壊し、春から秋にかけて再建。「澄碧樓記」を作る。                                                                              |
| 一七二四 | 四十七歳 | 長男の姚孔鑾 家を擴張し、「春暉亭記」を作る。                                                                                        |
| 一七二五 | 四十八歳 | 九月、長姉・六弟・長姉の娘とともに浮山(現在の安徽樅陽縣)に登り、「遊浮山日記」を作る。『錦囊冰鑑』刊行。                                                          |
| 一七二七 | 五十歳  | 一月、二甥の北冲に誘われ、夫・次男・長甥の崖舉とともに嚴陵(現在の浙江桐廬縣)の長姉の家に行く。八月、嚴陵にて「乾坤圈題辭」を作る。一月から十月の末まで、浙江各地を遊覽、「越遊紀事」及び詩百餘首を作る。十一月十二日歸宅。 |
| 一七二〇 | 五十三歳 | 四月十四日、夫 病没。                                                                                                    |

一七二三 五十六歳 次男の姚鉞 弟張廷玉の次女の婿養子にな  
る。

一七二四 五十七歳 『蠹窗詩集』刊行。

一七二八 六十一歳 通州（現在の北京市通州区）州判となつた次  
男の姚鉞の官署に行き、夏の間、弟張廷玉の住む澄懷  
園に滞在、「寓居澄懷園記」を作る。

桐城に歸る。

一七三四 六十七歳 城南の舊宅を購入、改築開始。

一七三七 七十歳 舊宅の改築が完成、「南園記」を作る

一七四一 七十四歳 正月四日、長男の姚孔鑾 病没。

一七四三 七十六歳 次男の姚鉞「養母」を理由に桐城に歸郷。

『蠹窗二集』刊行。

一七五二 八十五歳 没。

右の略年譜からは、張令儀が生涯實家と強い絆を持ち、経済的にも  
援助を受けていたことがわかる。さらに次男姚鉞は、弟張廷玉の婿養  
子になっている。彼女は長男姚孔鑾にあてた詩に張家から受けた恩を  
忘れてはいけなと教えている。

禱佛求醫煩老母 佛に禱りて醫を求むるは老母を煩わす

燎鬚煮藥頼同枝 鬚を燎たいて藥を煮るは同枝（兄弟）に頼る

外家恩比丘山重 外家の恩 丘山の重きに比す

好語兒曹大可思 兒曹に好語す 大いに思うべしと

（病中 長男の孔鑾に示す。湘門時に山左に客たり、『蠹窗詩集』卷五）  
實家からの援助は生活面にとどまらず、彼女の作品集はすべて實家  
の弟や親戚たちの手で出版されたものである。以下は、張令儀の刊行  
順の著作リストである。

○『錦囊冰鑑』二卷 これまで中國では散逸したと伝えられていたが、  
日本の内閣文庫（舊淺草文庫本）にて所藏を確認。この本について  
は稿を改めるつもりであるが、ここに簡単に紹介しておく。康熙  
五十四年（二七一五）刻、八册。二弟張廷玉・三弟張廷璐・魯一貞（名  
は之裕、字は亮儕、號は塵花軒主人、一六六五〜一七四〇）の序と張令儀  
の自序があり、第一卷の卷首に「龍眠女史張令儀柔嘉氏編」「弟廷  
玉・璐・瑒・瓘較訂」と署されている。卷首に「即續『龍文鞭影』  
とあるとおり、明末清初に桐城の楊臣諍が編纂した童蒙書『龍文鞭  
影』の形式に倣つたもの。二千句近くの四字成句について、故事や  
出典などの注解を施す。上欄に四字成句を配し、下欄の小字の注解  
は十六行二十七字、黒口、上下單邊、單魚尾。

○『蠹窗詩集』十四卷 中國國家圖書館・上海圖書館藏。雍正二年  
（二七二四）刻、四册。父の張英の題辭・夫の從兄弟である方正玉の

序・張廷玉の序・張令儀の自叙がある。中表紙に「龍眠張令儀柔嘉  
氏著、澄碧樓藏版」、目錄の末に「男孔鑾・鉞編次」、第一卷の卷首  
に「龍眠張令儀柔嘉氏著、姪女姚仲芝嗣徽校字、表兄馬鳳翥恆齋選、  
同懷弟廷玉硯齋・廷璐約齋・廷瑒思齋訂」と署されている。卷一  
〜卷十二に詩一〇二五首（子目は卷六七「澄碧樓集」、卷八〜十「靜齋  
集」、卷十一・十二「冷鵲吟」、卷十三に詩餘八九首、卷十四に古文雜  
述一二篇、續刻文一篇を収録。十行十九字、小字雙行、黒口、四周  
單邊、單魚尾。

○『蠹窗二集』六卷 中國國家圖書館・上海圖書館藏。乾隆八年（二七四三）  
刻、二册。卷首に張廷玉と張廷璐の序。蠹窗主人「南園記」文一篇、  
詩四七一首を収録。第一卷の卷首に「桐山張令儀蠹窗氏」と署され  
ている。十行十九字、小字雙行、黒口、四周單邊、單魚尾。

○戯曲『乾坤圈』(佚) 『蠹窗詩集』卷十四に「乾坤圈題辭」が残る。  
 ○戯曲『夢覺關』(佚) 『蠹窗詩集』卷十四に「夢覺關題辭」が残る。  
 右のリストによれば、張令儀の父張英や弟の廷玉・廷璐・廷瑒たちは、詩集の刊行にあたって序文の筆を執り、校定にも參與していたことがわかる。張令儀の育つた家庭はどのようなものだったのだろうか。一族の男性は、女性の創作についてどのように考えていたのか。張令儀の弟による詩集の序文をみてみよう。

憶う 吾が姊 棠花館に居りし時、余 諸弟と與に先後して室を受けて里門に歸り、常に湘門と題を圍ひきて藝を角わす。吾が姊亦た時時其の爲る所の詩歌古文辭を出だす。酒闌燈炮する毎に、古今を辨晰し、事は少しも休まず。彈指すれば十數年の内、吾が姊 諸弟に裨益する者良に多し。先公 予告し、太夫人と偕に南還するに及び、棠花は咫尺にして、吾が姊時に色笑に親づき、起居を問う。而して先公 暇日に子孫と與に掌故を徵引し、古人の詩篇を背誦するに、吾が姊 筆を援りて歌賦し、動もすれば輒ち數十言。(張廷玉『蠹窗詩文集序』、『蠹窗詩集』)

漢魏より降り、稱する所の班姬(班昭)・謝女(謝道韞)と、夫の秦嘉の妻(徐淑)、孝儀の妹(劉令嫻)、簡冊に見ゆる者 代よ其の人有り。而るに其の詩 或いは一二篇、多き者 或いは數十篇なるに、已に當時に名ありて後世に傳うるに足れり。而して要は未だ蠹窗の詩の多くして愈いよ工みなるが如き者有らず。予は其の必ず後に傳わること疑い無きを知るなり。」

(張廷璐『蠹窗二集序』、『蠹窗二集』)

この序文によると、張令儀の一族の男性は女性の創作活動を支持し、さらに文才ある女性を一族の誇りに思っていたことがわかる。母の姚

氏も一族の文學活動に参加していた。「含章閣偶然草」には、夫の張英との唱和詩や子女に贈った詩が残っている。明清時代の女性文學の中心は閨秀、すなわち士大夫の家の妻や娘であり、彼女たちは張令儀と同様、幼年から家庭での文學環境に恵まれていた。これはこの時代における女性文學の特徴の一つといえる。

ところで、理想的な賢婦像について、張氏一族の男性は次のように述べている。

『聰訓齋語』(張英の語録)に曰く、「治家の道は、謹肅を要と爲す。……」と。先公の家訓は此くの如し。因りて憶う 先室の姚夫人、幼くして端恪公(姚文然、一六二〇〜一六七八)の教を承け、長じては于歸し、能く兩先人の心に禮す。苟も言わず、苟も笑わず、一舉一動 悉く矩矱に遵い、「肅」の一字に于いて、庶幾ど之れに近し。惜しむらくは享年永からず、子女の輩をして親見して法を取らしむ能わす。

(張廷玉『澄懷園語』卷二)

張令儀の没後、当時の著名な女性作家王貞儀(一七六八〜一七九七)は彼女のために傳記「姚母張太夫人傳」を書いたが、そこでは、張令儀はほぼ完璧な賢婦として登場している。

七歳にして能く『孝經』に通じ、九歳にして『列女傳』の諸書に熟す。幼くして即ち莊重にして禮を習い、詩を爲るを知れり。舉動は儀に合い、則ち閨門の内、苟も言笑せず。

右の傳記が張令儀の生活の全貌を如實に傳えているかどうかは措くとしても、この時代の「賢婦」の評価基準が示されているといえよう。

前掲のスーザン・マン氏は、方苞を例にあげ、桐城について「婦人に對する觀念が特に保守的」と指摘したが、方苞は「金陵近支二節婦傳」では、夫が亡くなった後「拮据して以て身を苦しめ、艱辛して以て子

に課」した節婦を讃え、「常に居る者は覺えず、危變に遭いて然る後に婦人の擔荷の重きこと此くの如きを知れり」と、女性が家において發揮する役割の大きさを強調している。とくに男性が先没したり、或いは遊學や宦遊で長期間故郷を離れる場合には、子女の教育は一族の女性に托された。女性の役割を重視する桐城男性は、子供を訓育することのできる母を育成するため、女性に幼年から學問を授けていた。これは桐地の傳統の一つとして縣志にも記されている。

邑女訓を重んじ、七八歳の時『女四書』『毛詩』を以て之れに讀を授く。

張令儀が幼年期に「間ま先太夫人に従いて『論語』『毛詩』を授か」つたことも、おそらく同じ目的だったと思われる。

賢母の譽れは、張氏一族の女性、或いは桐城特有のものとはいえないが、張氏一族は「父子宰相」として脚光を浴びていたため、一族の母である姚氏には多くの注目が集まった。『清史稿』『列女傳』には、康熙帝が「張廷玉兄弟、母教の素有り、獨り父訓にあらざるのみ」と、姚氏の賢徳を讃えたという記録が見える。このような環境で育った張令儀が、子女の教育に深い關心を抱くようになるのは必然であろう。とくに、第三章に引く「錦囊冰鑑序」に述べられるように、夫の姚士封が科擧で落第を重ねて「四方に餽口」し、故郷に残され「終歲貧を食」していた張令儀が、人生の希望を子女に托して教育に傾注したことは理解に難くない。これは彼女が童蒙書『錦囊冰鑑』を編纂した一因でもあろう。

## 二、詩文にみる「才女」と「賢婦」の葛藤

胡文楷編『歷代婦女著作考』（上海古籍出版社、二〇〇八年増訂本）に

張令儀の家庭と文學

收録される女性作家は、漢魏六朝から元代までは一一七名にすぎないが、明清兩代においては一躍およそ四千名に至る。明清時期は女性文學の最盛期といえる。文學的才能に恵まれた女性は「才女」と稱され、一門の誇りでもあった。しかし一方、この時代に最も重要視されていたのは女徳を有する「賢婦」である。才女とは女性個人の才に着目した言葉であるが、賢婦とは家の婦としての内助の功に重きがある。女性作家の身分は殆ど閨秀であったので、才女は賢婦である必要もなかった。自らの才を伸長させたいと思い、女徳の體現者であろうとする狭間で、女性作家は内面に矛盾や葛藤を抱えていたのである。以下、具體的に張令儀の作品を通じてこれを考えたい。

### 1、賢婦の立場と「王郎」の隱喩

「姚母張太夫人傳」に理想的な賢婦像で登場した張令儀は、作品中にも自分が賢婦の役目を全うしたことを記している。

短燭殘更掩敝廬 短燭 殘更 敝廬を掩う  
敢將蕭散負三餘 敢えて蕭散を將て三餘に負かんや  
工嫌婢情親縫紉 工は婢の情を嫌いて親ら縫紉し  
學恐兒疎自授書 學は兒の疎を恐れて自ら書を授く

（夜坐して諸子に對して作有り）、『蠹窗詩集』卷四  
さらになかなか科擧に合格しない夫の姚士封を一世の大儒である董仲舒に擬えて勵ましている。

懷中空有天人策 懷中 空しく 天人の策有り  
何處能容董仲舒 何れの處か能く董仲舒を容れん

（懷を書して湘門に呈す）、『蠹窗詩集』卷八  
また、夫を弔う詩の冒頭には、

文星驚墮哲人徂 文星驚き墮ちて哲人徂ゆき  
 舉世咸嗟失楷模 舉世咸み楷模を失うを嗟す

〔夫子を哭す二十章〕二十首之一、『蠹窗詩集』卷十二

と、夫を褒め稱えている。

しかし、これと矛盾するのは、張令儀が實家の父から贈られた屋敷について記した文の中で、夫を「王郎」に擬えていることである。

先の舅翁の非菴府君（姚文熊、號は非菴）清白にして家を傳え、嗣息 負薪の歎有るを免かれず。家貧しくて四壁、地少なくして錐を容るるごとし。十載 飄零して、梁鴻の寄廡を等まち、三更 樹を遶り、烏鵲の栖無きを逐う。已やんぬるかな王郎、秦贄に終わらん。歲次は甲申（一七〇四）、乃ち嚴大人の相國公 致政の二年なり。是に于いて祿は故人に及び、弱女に惠瞻し、爰に宅一區を賜たまはる。<sup>17</sup>

〔蠹窗小記〕、『蠹窗詩集』卷十四

東晉の才女謝道韞が、謝氏一族に比べて見劣りのする夫の王凝之のことを「意おもわざりき天壤の中、乃ち王郎有りとは<sup>18</sup>」と揶揄した『世說新語』の逸話は、よく知られている。張令儀の夫姚士封は、科擧に合格できないばかりか、生計を立てることも苦手だったらしく、張令儀が結婚後に實家の經濟援助を受けていたことは先述したとおりである。彼女は右の文で、夫を「王郎」のほか、「秦贄」、つまり財産がある家の婿養子と喻えた。

學人にすらなれなかつた夫とは對照的に、張令儀の父張英と兄弟の張廷瓚・張廷玉・張廷璐・張廷瑑たちは、皆進士になり、順調に顯達した。しかも彼らは張令儀の才能の良き理解者でもあった。前掲の張廷玉・張廷璐の序文の外、父の張英もその序文で娘の優れた文才を認めている。

古を論じて識有り、典故を用いて精當たり。筆力清穎たり、時に新意を出だす。……昔者 謝道韞ただ柳絮の句を傳え、餘は多く見えず。今より之れを觀れば、豈に古今の人は相い及ばずと謂わんや？ 蠹窗の學詩より益ます精進を加うれば、以て彤管女史と互いに相い輝映するに足るなり。<sup>19</sup>（張英「蠹窗學詩題辭」、『蠹窗詩集』）

宰相に登りつめた父と弟から文才を稱えられていた張令儀の心に、科擧で落第を重ねる夫を輕侮する感情が生じていたことは、想像に難くない。このような思いは彼女の自傳的な詩「惆悵の吟」にも吐露されている。

憶昔承權在謝家	憶う 昔 權を承けて謝家に在り
封胡過末鬪才華	封 胡 過 末 才華を鬪わす
清言暢處風生座	清言 暢たる處 風座に生じ
麗句吟成筆有花	麗句 吟成りて筆に花有り
風裏落紅分溷席	風裏 落紅 溷席に分かれ
秋來乳燕各天涯	秋來りて 乳燕 各おの天涯
每當飛雪添惆悵	飛雪に當たる毎に惆悵を添え
太傅門庭冷舊沙	太傅の門庭 舊沙冷たし

〔惆悵の吟〕五首之二、『蠹窗詩集』卷六

この詩では、實家は「謝家」、兄弟は東晉の才子である封・胡・過・末に喻えられているが、これは自分自身を才女謝道韞に擬えた言い方でもある。また「風裏 落紅 溷席に分かれ」の句には、「飄茵落溷」の典故が用いられているが、これは自身の不運を意識した表現である。つまり結婚は彼女にとって、まるで花が糞溷に落ちたかのようなことだったというのである。

では、夫の姚士封はいったいどのような人物だったのだろうか。董

仲舒のような才子であろうか。凡庸な「王郎」であろうか。左は姚士封の傳記である。

湘門公 士封、字は玉筍、階州の三子、邑の庠生なり。幼くして張文端の器とする所と爲り、女を以て之れに字す。長ずるに及んで、遍く經史を涉し、詩文に工みなり。歴する所の秦・豫・閩・浙の唱和の作、一時の名士咸な之れを好む。戊子（一七〇八）の鄉試、主司 其の文を奇とし、已に前列に定む。榜發の日、違式を以て落さる。主司 歎息すること之れを久しうす。

（『麻溪姚氏先德傳』卷五、民國八年重刻本）

姚士封、字は玉筍、號は湘門。縣の學生、文熊の子。博く經史を涉し、制舉の藝に工みにして、兼ねて詩 古文詞を善くす。卒年は五十。

（廖大聞『道光續修桐城縣志』卷十六、「人物志・文苑」）

これらの傳記によれば、姚士封には文才があり、若い頃張英に見込まれ、娘の婚約者として選ばれたことがわかる。彼は科擧の運に恵まれなかつたが、詩に秀で作品は好評を博していた。姚士封は董仲舒のような一世の大儒とはいえないまでも、決して凡庸な「王郎」というわけではないのだ。

才女の結婚について「女弟子」の師として有名な袁枚は、「近日閩秀の詩を能くする者、往々にして嫁げば佳耦無く、天壤王郎の歎有り」と言っている。こうした女性作家による不運な結婚についての慨歎は、男性士大夫がしばしば詩に詠う官界での不遇感に似ている。「佳耦無し」という不運は、才女の定めというより、むしろ才女の文學上のポーズとしてとらえることもできよう。ただし、管見の及ぶところ、張令儀と同様、明清時代の女性作家の作品には、「王郎」「溷席」というような隱喩はあつても、夫に對する不満や輕蔑を直敘した作品はな

いのである。それどころか、ほとんどは夫を褒め稱えるものである。その背景には女徳の思想があつた。「王郎」「溷席」のような内容の作品は、數からいえば多くないが、これによつて女性作家たちの内面、すなわち「才女」の誇りと「賢婦」への希求という狭間で葛藤が知られるのである。

## 2、「織紐」と「書籤」の間

張令儀は自分の作品集を書齋名から取つて「蠹窗」と名付け、同名の詩に次のように詠っている。

沈水香中夜漏餘 沈水香中夜漏の餘

月痕冷浸一牀書 月痕 冷く浸す 一牀の書

百城未敢誇南面 百城 未だ敢えて南面を誇らず

且乞閒身作壁魚 且く乞う 閒身 壁魚と作るを

（蠹窗）、『蠹窗詩集』卷四

「蠹」は、壁魚・蠹魚・衣魚ともいい、紙を食べる蟲である。張令儀の理想は、讀書に没頭することであつた。だが、當時における賢婦の重要な評價基準は、婦徳・婦言・婦容・婦工という四徳であり、紡績や針仕事は婦工の代表的なものである。前掲の『歴代婦女著作考』に著録される明清時代の女性作品集の書名で最も多いのは、「繡餘」と題されるもので、計一五八部にのぼる。そのほか、「紅餘」「鍼餘」「繡間」「紅餘」「織餘」「紡餘」「績餘」「蓄餘」「組餘」などは六九部、すなわち紡績や針仕事の暇というような意味が含まれるのは、總計二二七部にも至る。多くの女性作家がその集名に「繡餘」を選んだのは、自らの文學活動は家事の餘暇に行われるに過ぎず、本業に差し障りはなかつたという辯解であると同時に、また兩方を全うしたという

自負でもあろう。

張令儀は文學と家事の關係をどのようにとらえていたのだろうか。まず、彼女の「幽居雜詠」の第二十九首をあげる。

織紙有餘力 織紙餘力有れば  
 何妨雅俗兼 何ぞ雅俗を兼ねるを妨げんや  
 茶煙生石鼎 茶煙 石鼎に生じ  
 竹影覆湘簾 竹影 湘簾を覆う  
 日永閒方覺 日永くして 閒方に覺え  
 書奇讀未厭 書は奇にして讀むに未だ厭かず  
 會心時自得 會心し時に得る有れば  
 每忘問蠶鹽 毎に蠶鹽を問うを忘る

(「幽居雜詠」三十首之二十九、『蠶窗詩集』卷七)

張令儀はこの詩で文學は家事の餘業だと言いつつも、書物に夢中になると「蠶鹽」すなわち炊事(ただしこの階層の女性が水仕事などの勞働をするわけではない)さえ忘れてしまうことを告白している。さらに彼女には意識的に「餘業」を優先させたことを詠った詩もある。

著書忘歲月 書を著して歲月を忘る  
 長日掩蕭齋 長日 蕭齋を掩う  
 與世原無意 世に與るは原より意無し  
 臨風且放懷 風に臨んで且く放懷す  
 紫蘭依片石 紫蘭 片石に依りて  
 紅藥傍閒階 紅藥 閒階に傍う  
 莫漫愁中饋 漫りに中饋を愁う莫れ  
 開奩檢鳳釵 奩を開けて鳳釵を檢す

自注…予著有『錦囊冰鑑』一書。

予が著に『錦囊冰鑑』の

一書有り。

(「幽居雜詠」三十首之九、『蠶窗詩集』卷七)  
 この詩は「中饋」すなわち一家の食費のために、嫁入り道具である簪を賣り、自らは『錦囊冰鑑』の編纂に没頭したことを詠んだものである。しかし、「閨秀」である彼女は文學に専念しようとしても「婦」としての責務から逃れることはできなかった。次の詩には、「俗累」すなわち家事が文學の妨げとなる苦惱が詠われている。

衣襦需補綴 衣襦 補綴を需め  
 午夜繼焚膏 午夜 繼いで膏を焚く  
 井臼原甘分 井臼 原より分に甘んじ  
 機絲敢告勞 機絲 敢えて勞を告げんや  
 雖然忘鼎食 鼎食(豪華な暮らし)を忘ると雖然も  
 頗愛弄柔毫 頗る愛す 柔毫(筆)を弄するを  
 俗累纏如繭 俗累 纏うこと繭の如く  
 紅塵未許逃 紅塵 未だ逃を許さず

(「幽居雜詠」三十首之十九、『蠶窗詩集』卷七)

文學と家事の狭間に在る苦惱は、張令儀特有のものではなく、女性作家全般に共通する悩みであった。顧若璞(一五九二〜一六八一?)は詩集の自序に次のように述べている。

夫子に事えて十有三年、彊半藥爐と伍を爲す。後に子女漸く長じ、食費漸く繁たり、未だ文苑を覃精するに暇あらず。或いは稍や誦する所有るも、鈔畧全たからず。

『名媛詩話』の著者として知られる女性詩人の沈善寶(一八〇八〜一八六二)も、家事が文學活動の妨げになることについて、五叔母吳世佑の例をあげてこう述べている。



先慈姉妹五人、惟だ鬘雲五從母の世佑 最も吟詠に耽る。……在室（未婚）時に詩畫を以て自ら娛しむ。性情は瀟灑にして、吐屬は風雅。……兒女既に多くして、筆墨遂に廢す。毎に余に謂いて云う、「雅人に作らんと欲せば、必ず終身在室なるべし。近日偶たま一二句を得、足成せんと思欲するも、輒ち俗事に興を敗らる。」と。

ところで、張令儀は幼年から母に「女子は織紙を工みにし、酒漿を事とし、詩書は務むる所に非ず。其の大義を知れば可なり。」と戒められていたが、前掲詩の「俗累纏うこと繭の如く」や「何ぞ雅俗を兼ねるを妨げんや」という言葉からは、彼女の潜在意識が垣間見える。高雅な文學生活に對して、家事に専念することは婦徳ではあつても、彼女にとっては俗事だつた。彼女の「蠹窗」詩は、沈善寶の同感を得、沈は『名媛詩話』の中で「閨閣の書癡、余と與に同じ情有るに似たり」と評している。前掲の顧若璞も、「賢婦」として名高かつたが、「使し吾壹意に讀書するを得れば、即い班の十志を補う能わざるとも、或いは雪を謝の庭に詠うべし。（班昭のようになれなくとも、文才を伸ばして謝道韞ぐらいにはなれる）」と述べ、夫と子女の世話に明け暮れたため、文才を磨くことができなかつたことに對する口惜しさを吐露している。自由に文才を發揮し、文學に没頭したいと願う女性作家たちは、幼年からの女徳教育と自分の文才に對する自負、この板挾みにあつたのである。

### 三、「内言不出」と「揚名顯姓」の相剋

閨秀作家が自らの生活や思いを作品化しようとする時、直面したのは、「内言は閨を出でず（内言不出於閨）」（『禮記』「曲禮」上）という觀

念である。王貞儀は「答白夫人」において、自らの作品を軽々しく他人に見せなかつた理由について、次のように述べている。

儀（筆者注…貞儀）は智淺く學疏にして、翰墨に耽ることを喜むと雖も、從りて輕易に出だして以て人に示さず。……其の隱秘に甘んずる所以の者は、唯だ内言出でずの訓を守り、以て女子の道を存するのみ。

また、未婚の間は詩を作つても、結婚後に筆を折つたり、死の直前に自作をすべて焼き捨てる女性作家も少なくなかつた。『國朝閨秀正始集』によれば、康熙癸丑（一六七三）の狀元韓菼の娘である韓韞玉（生卒未詳）は、「病歿の前、稿を取りて盡く之れを焚く。曰く、婦人の事に非ざるなり」と傳えられる。そして一生創作を續け、作品集が刊行された女性作家でも、文學は「賢婦」としての務めを記録する手段であるとか、生活の苦しみを癒す方便にすぎなかつたなどとして、自らの創作について辯解することが多い。次は張令儀が『錦囊冰鑑』の上梓の際に記した序文である。

夫子珠を懷きて憤に在り、四方に餬口す。予終歲貧を食し、藿鹽に毘勉し、皆十指に給を仰ぐ（筆者注…針仕事で生計を立てること）。……予の學は韋母（韋逞の母宋氏、宣文君）に慚じ、才は班姬（班昭）に愧じ、加うるに塵務心に經、識見廣からざるを以てす。聊か臆度に憑り、叢雜章無きも、或いは篝燈續火、風雨晦明、稚子琅琅として誦讀一過するを聽けば、古人と晤對するが如く、愁苦を稍や釋くに庶幾きのみ。諸弟之れを見て、謬りて獎與を加え、梓人に付し、諸れを同好に公にせんことを請う。嗟乎！謝道韞の解圍は、其の高朗無し。李易安の賭茗は、此の清閑乏し。僅だ王霸の妻の、農を爲して世を没ると同じきなり。大い

に老萊の婦の、偕ともに隠れて園を灌するに似たり。身は既に隠たり、何ぞ名を用いんや。蓋し以て童蒙を勸誘せんと欲すればなり。敢て語れを當世に質たすに非ざるなり。<sup>33)</sup>

前掲の「幽居雜咏」第九首では、張令儀は嘗て家事のつとめをよそに、『錦囊冰鑑』の編纂に夢中になつたと詠っている。ところが、この序文では、彼女が忙しい針仕事の手をとめてこの本を編纂したのは、子供の教育のためであり、それが出版されることになつたのは、弟たちの強要によるものだという。張令儀は「弟たちの強要」という常套的な表現で自己韜晦しようとしたが、才女のシンボルである謝道韞・李清照と賢婦の代表である王霸の妻・老萊の婦が共にあげられていることは、彼女の中に「才女」と「賢婦」の両面があつたことを示唆している。また、自らは謝道韞・李清照のような才女と拮抗できるものではないという謙遜の辭には、才を世に示したいという思いも込められていよう。

彼女には「才女」としての功名心もあつた。次は張令儀が、扶胤によつて降靈した女仙と唱和した詩篇の最後に附した跋文であるが、ここで彼女は自らの文名へのこだわりをみせている。

此の壬寅の早秋、清河の諸昆季は仙を修堂に講ず。女仙の降壇する有りて、自ら「姑蘇の碧篠」と書し、詩を作ることを數首。問う者有るも、亦た甚だしくは酬對せず、但だ蠹窗主人の和を索もとむることを書するのみ。予は何れの人か、斯くして乃ち仙靈に知らるるを蒙る。其の詩意を讀むに、沈鬱 悲思、志を得ずして没する者に似たり。因りて其の意に感じ、謬りて和すること五首。他日諸れを壇下に焚き、尙お其の筆削を求むるなり。<sup>34)</sup>

これによれば、降靈した「姑蘇の碧篠」は、自動筆記を通じてほかならぬ張令儀との唱和を求めたという。張令儀が唱和詩の末に、こうした経緯を詳しく記しているのは、自分の文名を誇りとする氣持があつたためであろう。彼女はほかの作品でも、詩文を世に残し、名を博したいという希望を漏らしている。

身後詩千首 身後 詩千首  
枕中書一函 枕中書一函  
放言聊寄慨 放言して聊か慨を寄せ  
他日任蕪芟 他日蕪芟に任す<sup>35)</sup>

（「幽居雜咏」三十首之三十一、『蠹窗詩集』卷七）  
壽命原非金石固 壽命 原より金石の固に非ず  
一朝倉卒欲言難 一朝 倉卒すれば言わんと欲するも難し  
無多身後殘詩卷 無多の身後に詩卷を残す  
莫作他年覆瓿看 他年 覆瓿あつかいの看と作す莫れ

（病起して口占して兩兒に示す）、『蠹窗詩集』卷十）  
自分の文名を重んじていたからこそ、念願かなつて『蠹窗詩集』が上梓されることになつた時、張令儀は編集役を擔つた姪の姚仲芝に對して、その喜びと感謝の念を次のように表した。

自ら念う 生平の淹蹇困塞は、比數すべき無きに、乃ち猶お予の湮没無聞を恐れて之を彰せんと欲する者有り。知己の感、豈に多く得べけんや。  
（『蠹窗詩集』「自敘」）

#### 四、戯曲にみる「才女」の能動性と虚無感

明清時代の女性作家は女徳や「内言は闔を出でず」の觀念から、

詩文を作る時、本心の吐露を躊躇する向きがあったが、戯曲の創作は遊戯と見なされていたため、詩文に比べて束縛が緩かったといえる。そのため、多くの女性作家がこのジャンルを用いて、女徳の制約から解放された女性像を描き出した。近年、研究者に注目されている王筠（一七四九？～一八一九？）の『繁華夢』や吳藻の『喬影』、何珮珠（二八一九？～？）の『梨花夢』などはその好例といえる。張令儀の作った戯曲『乾坤圈』と『夢覺關』は、時代的にこれらに先行する。現在この二つの戯曲は散逸して傳わらないが、幸い『蠹窗詩集』には「題辭」が残っており、これによって、戯曲の概略が窺える。

まず「乾坤圈題辭」をあげる。「乾坤圈」は唐五代の時代に、男装して狀元となつたとされる黄崇嘏の物語をもとに作られた作品である。

蠹窗主人 偶たま長夏に於いて唐詩を翻閱し、因りて黄崇嘏の事に感ず。……因りて歎ず、崇嘏此くの如き聰明才智を具うるも、終に未だ其の業を竟えず、卒に初服に返るを。寧ぞ復た朱を調えて粉を弄し、重ひ巾櫛を執り、人に向かい憐れみを乞わんや？故に托するに神仙を以てし、閒雲の高鳥と作し、乾坤の拘縛を受けざらしむ。乃ち一劇を演成して、名づけて『乾坤圈』と曰う。雅俗をして共に賞せしむれば、亦た娥眉の爲に色を生ずるに足る。豈に快ならずや？

（乾坤圈題辭）『蠹窗詩集』卷十四  
黄崇嘏の物語をもとに作られた作品は複数あるが、一番有名なのは徐渭（一五二二～一五九三）の戯曲「女狀元辭鳳得鳳」である。「女狀元」における黄崇嘏は自分が女子であることを上司の周庠に打ち明けて周庠の娘との結婚を断つたが、結局官職を辞め、女子に返って周庠の息子に嫁いでいる。しかし、張令儀は黄崇嘏が女子に戻り、人の妻にな

る結末に納得できなかったようで、『乾坤圈』では、神仙に假託することで黄崇嘏を女であることの制約や婚姻の束縛から救出した。張令儀はここで黄崇嘏のような才女が結婚して夫に仕えるのは、「人に向かい憐れみを乞う」ようなことだと言うのである。

次に「夢覺關題辭」から『夢覺關』の内容を見ていこう。

予は偶たま稗官家謂う所の『歸蓮夢』なる者を閲し、其の癡情幻境、宛轉として纏綿なるを見る。……老僧の棒喝を借り、倩女の離魂を挽すれば、無上の菩提を證し、彼の覺岸に登るを得ん。是に于いて其の無穢を莛り、編して劇本を爲す。之れに名づけて『夢覺關』と曰う。（夢覺關題辭）『蠹窗詩集』卷十四

『歸蓮夢』とは、蘇庵主人（本名未詳）が著して雍正・乾隆年間に刊行された小説であり、現在『古本小説集成』第三輯（上海古籍出版社、一九九一年）に収載されている。この小説のあらすじは次のようである。女主人公の白蓮岸は幼年から老僧の手で育てられてきたが、成年後、白猿から天書を得て、白蓮教を創立し、柳林寨の頭領になつて覇業を成し遂げた。彼女は則天武后に倣つて「男寵」を蓄えようとし、男装して「才貌雙全」の男を探す旅に出た。彼女は書生の王昌年にひかれ、王昌年は崔香雪という女性と婚約していた。最後、柳林寨は官僚となった王昌年の手引きによつて朝廷に滅ぼされてしまった。自らの覇業も想い人も失つた白蓮岸は、この世の一切は夢に過ぎないことを悟り、信仰の道に入り、最後に登仙した。

これによれば、張令儀が戯曲化した白蓮岸の物語は、黄崇嘏と同様、自らの才によつて功績を立てた女性を描いたものである。白蓮岸は則天武后の「男寵」に憧れており、「男尊女卑」という規範を覆す女性である。張令儀の『夢覺關』は、この「男」と「女」の性別を逆轉し

た小説をもとに作られた戯曲なのである。

生涯何度も夫の落第を見、しかも自分の才能に自信を持っていた張令儀は、黄崇嘏のように科擧に参加して才能を示し、或いは白蓮岸のように覇業を成し遂げて自分で僮の男を探して結婚することを夢想したのかもしれない。彼女にとつて、黄崇嘏や白蓮岸のように、自分の才能を發揮して名をあげる「才女」は、理想であつた。だが、張令儀の時代において、どのように優れた才能があつても、女性がそのような人生を求めるのは白晝夢に等しい。張令儀は戯曲によつて才能ある女性が男性の從屬物として生きざるを得ない運命に修正を加えようとしたが、解決方法としては神仙に假託せざるを得なかつた。

實は、才女が男子に變裝して功績を立てた後に、信仰の道に入つて神仙になるという結末は、女性作家による戯曲が陥りやすいマンネリズムといえる。例えば、王筠は、『繁華夢』の主人公王夢麟の科白に托し、「生まれは男子に非ずして、祖を耀かしめ宗を光らしむる能わず。身は裙釵を著け、揚名顯姓の路無し」と語り、女が自己實現できない現實を歎いた。しかし『繁華夢』の結末は、狀元になつて榮華を極めた王夢麟が、神仙の教えによつて、ついにこの世が夢であることを悟るといふ内容になつてゐる。王筠の父はこの戯曲の跋文で、娘のことを、「幼くして異質を稟け、書史目を過ぐれば即ち解す。毎に身は巾幗に列するを以て恨と爲す。因りて『繁華夢』一劇を撰し、以て自ら其の胸臆を抒す。」<sup>(1)</sup>というが、この戯曲の結末に對しては、「大夢の醒後、癡の如く酔の如く、死なず活きず。仙佛を以て收科と作さざるを得ざるは、亦た無聊の極思なり。」<sup>(2)</sup>という評論を加えている。これは張令儀をはじめとする明清女性作家の作品に共通する點でもある。彼女たちは、戯曲というジャンルで「才女」の能動的な人生を描き、「賢

婦」の立場では口に出せなかつた思いを吐露したが、結局主人公を女徳の束縛が及ばない仙佛に托すほかはなかつたのである。

### おわりに

これまで桐城女性文學に關する研究は、その作品を目睹することが難しいという事情もあつて、おむね當地の男性（特に方苞や姚鼐など桐城派の代表人物）が節婦や烈婦のために書いた壽序や傳記などに基ついていた。そのため、桐城、或いは安徽の女性はそのまま「節婦」の文化と結び付けられ、彼女たちの文學や思想が注目されることはほとんどなかつた。

幸い、桐城の女性作家である張令儀は、複数のジャンルにわたつて數多くの作品を残しており、そこには彼女の日常的な文學活動や複雑な思想を見ることが出来る。彼女の作品の大半は、夫の才能を褒め稱えるものや、賢婦としての務めに勵む苦勞を記すものであるが、一方、夫を「王郎」・「秦贅」に喩え、自分の結婚を「糞溷」に擬えるものがあるほか、家事をおろそかにして文學に夢中になつたことを告白する内容もある。彼女は詩文では隱喩や典故によつて自己の内面を表現し、さらに戯曲という遊戯と見なされていたジャンルを用いて、賢婦の立場では口に出せなかつた思いを吐露した。張令儀の作品群は男性作家の手による節婦傳や烈女傳に見える女徳にがんにがらめにされた桐城女性というイメージを覆すものである。

一方、多くの研究者によつて先進的で自由な氣風が喧傳され、封建女徳から解放された「才女」というイメージが先行している江蘇・浙江の女性作家はどうであらうか。本論にあげた女性作家のうち、王筠が長安（陝西西安）の人である以外、韓韞玉は長洲（江蘇蘇州）、顧若

璞は仁和（浙江杭州）、沈善寶は錢塘（浙江杭州）の人であり、皆江蘇・浙江の出身である。彼女たちの作品にも、張令儀と共通する矛盾や苦惱、すなわち「才女」と「賢婦」の葛藤を少なからず見ることができ、このことは「才女」の文化と「節婦」の文化は單純に地域によって區分されるものではないことを示しているようだが、この問題は個々の女性作家についてのさらなる検討を必要としており、稿を改めて論じたい。

張令儀は桐城の女性作家ではあるが、明清時代の閩秀作家全體を象徴する女性ともいえる。彼女の研究を通じて、我々はこの時代における自由で開放的な社會氣風と封建女德觀念の狭間に在った明清女性文學が内攝していた矛盾や葛藤を窺うことができるのである。

注

- (1) Susan Mann 『Women Writers in Qing Times, by Region』、『Precious Records—Women in China's Long Eighteenth Century』(Stanford University Press、一九九七年)、頁二二二。
- (2) 安徽は、もともと江蘇とともに江南省に屬していたが、康熙六年（一六六七）、安徽・江蘇という二つの省に分けられた。ただし慣習上、安徽・江蘇・浙江の三省は江南と呼ばれている。
- (3) 前掲書、二〇二頁。
- (4) 拙稿「明清女性文學における才女文化と節婦文化—吳江の葉氏と桐城の方氏の比較を中心に」（奈良女子大學大学院『人間文化研究科年報』第二十六號）、「遺民の家における女性詩人—明末清初の桐城方氏を中心に」（奈良女子大學日本アジア言語文化學會『紋説』第三十九號、平成二十四年三月）を参照。

(5) 姚國禎『桐城麻溪姚氏宗譜』（民國八年重刻本）によると、張令儀の息子は二人、娘は一人である。王貞儀『姚母張太夫人傳』（『德風亭初集』卷二）、美國哈佛大學哈佛燕京圖書館藏明清婦女著述彙刊』には、息子二人・娘三人とある。張令儀自身は「獨坐感懷」（『蠹窗二集』卷六）には、「我生五男兒、今僅存其一」と述べている。

(6) 張令儀『蠹窗詩集』、『蠹窗二集』、張廷玉『澄懷園主人自訂年譜』、『桐城麻溪姚氏宗譜』、『康熙桐城縣志』、『道光續修桐城縣志』、『清史稿』などをもとに作成、年齢は數え年による。

(7) 王貞儀『姚母張太夫人傳』には「太夫人生康熙某年月日、終於乾隆某年月日、享年七十有九」とあるが、『桐城麻溪姚氏宗譜』には、「康熙戊申（一六六八）十一月十一日生、乾隆壬申（一七五二）九月八日卒」と記されている。張廷玉『澄懷園主人自訂年譜』における記録は一七四九年までであり、張令儀の卒についての記録は見えない。これらを勘案すると、張令儀は一七五二年に、八十五歳で亡くなった可能性が高い。

(8) 『錦囊冰鑑』の張廷璐の序言からは『錦囊冰鑑』と『蠹窗詩集』の刊行が弟たちによって企畫されたことがわかる。費用についても『蠹窗詩集』『自敘』に、「姪女仲芝は、乃ち長姉の次女なり、……爲に殘篇を收拾し、資を捐てて災を梨棗に付す」と述べている。この姪女は張氏に嫁いだ女性であり、刊行資金は實質的に張氏一族が準備したことがわかる。

(9) 「憶吾姊居棠花館時、余與諸弟先後受室歸里門、常與湘門鬪題角藝。吾姊亦時時出其所爲詩歌古文辭。每酒闌燈熄、辨晰古今、事不少休。彈指十數年內、吾姊裨益於諸弟者良多。及先公予告、偕太夫人南還、棠花咫尺、吾姊時親色笑、問起居。而先公暇日與子孫徵引掌故、背誦古人詩篇、吾姊援筆歌賦、動輒數十言。」

(10) 「漢魏而降、所稱班姬謝女、與夫秦嘉之妻、孝儀之妹、見於簡冊者代有其人。而其詩或一二篇、多者或數十篇、已足名當時而傳後世。而要未

- 有如蠹窗之詩之多而愈工者。予知其必傳於後無疑也。」
- (11) 『聰訓齋語』曰、「治家之道、謹肅爲要。……先公之家訓如此。因憶先室姚夫人、幼承端恪公之教、長而于歸、能禮兩先人之心。不苟言、不苟笑、一舉一動悉遵矩矱、于『肅』之一字、庶幾近之。惜乎享年不永、不能令子女輩親見而取法也。」
- (12) 王貞儀「姚母張太夫人傳」。「七歲能通『孝經』、九歲熟『列女傳』諸書。幼卽莊重習禮、知爲詩。舉動合儀、則閨門之內、不苟言笑。」
- (13) 方苞「金陵近支二節婦傳」、「方苞集」卷八。「拮据以苦身、艱辛以課子」「居常者不覺、遭危變然後知婦人擔荷之重如此。」
- (14) 廖大聞『道光續修桐城縣志』卷三、「中國地方志集成」(江蘇古籍出版社、一九九八年)、「安徽府縣志輯」十二所収。「呂重女訓」七八歲時以『女四書』『毛詩』授之讀。」
- (15) 「錦囊冰鑑序」、「蠹窗詩集」卷十四。「間從先太夫人授『論語』、『毛詩』。」
- (16) 「張英妻姚氏傳」、「清史稿」卷五百八。「聖祖嘗顧左右曰、『張廷玉兄弟、母教之有素、不獨父訓也。』」
- (17) 「先舅翁非菴府君清白傳家、嗣息不免有負薪之歎。家貧四壁、地少容錫。十載飄零、等梁鴻之寄廡、三更遶樹、逐烏鵲之無栖。已矣王郎、終焉秦賈。歲次甲申、乃嚴大人相國公致政之二年。于是祿及故人、惠瞻弱女、爰賜宅一區。」
- (18) 『世說新語』「賢媛篇」。「不意天壤之中、乃有王郎。」
- (19) 「論古有識、用典故精當。筆力清穎、時出新意。……昔者謝道韞止傳柳絮之句、而餘不多見。由今觀之、豈得謂古今人不相及耶?由『蠹窗學詩』而益加精進、足以與彤管女史互相輝映矣。」
- (20) 『南史』卷五十七、「范雲傳」。「人生如樹花同發、隨風而墜、自有拂簾幌墜於茵席之上、自有關籬牆落於糞溷之中。」
- (21) 「湘門公土封、字玉筍、階州三子、邑庠生。幼爲張文端所器、以女字之。及長、遍涉經史、工詩文。所歷秦·豫·閩·浙唱和之作、一時名士咸好之。戊子鄉試、主司奇其文、已定前列。榜發日、以違式見落。主司歎息久之。」
- (22) 「姚士封、字玉筍、號湘門。縣學生、文熊子。博涉經史、工制舉藝、兼善詩古文詞。卒年五十。」
- (23) 袁枚『隨園詩話』、「補遺」卷四。「近日閩秀能詩者、往往嫁無佳耦、有天壤王郎之歎。」
- (24) 『魏書』卷九十、「逸士傳」李謐條。「丈夫擁書萬卷、何假南面百城。」
- (25) 顧若璞「自序」、「臥月軒稿」(光緒二十三年刻本)。「事夫子十有三年、疆半與藥爐爲伍。後子女漸長、食費漸繁、未暇覃精文苑。或稍有所誦、鈔畧不全。」
- (26) 「名媛詩話」(『續修四庫全書』本)卷六。「先慈姊妹五人、惟鬢雲五從母世佑最耽吟詠。……在室時以詩畫自娛。性情瀟灑、吐屬風雅。……兒女既多、筆墨遂廢。每謂余云、『欲作雅人、必須終身在室。近日偶得一二句、思欲足成、輒爲俗事敗興。』」
- (27) 「錦囊冰鑑序」。「女子工織紉、事酒漿、詩書非所務。知其大義可也。」
- (28) 『名媛詩話』卷二。「桐城張柔嘉令儀……『蠹窗』云、……閨閣書癡、與余似有同情。」
- (29) 顧若羣「臥月軒稿題詞」。「使吾得意讀書、卽不能補班十志、或可詠雪謝庭。」
- (30) 王貞儀「答白夫人」、「德風亭初集」卷四。「儀智淺學疏、雖喜耽翰墨、而從不輕易出以示人。……其所以甘於隱秘者、唯守內言不出之訓、以存女子之道耳。」
- (31) 完顏惲珠『國朝閨秀正始集』(道光十一年紅香館刻本)卷四、韓韞玉條。「病歿前、取稿盡焚之。曰、『非婦人事也。』」
- (32) 義理の弟王獻之が客と談義の勝負に負けそうになったことを見た謝道韞は、小問使いをやって「小郎の爲に圍を解かんと欲す」と言わせ、青

いうすぎぬの幕を隔てて王獻之の代わりに客と論争して勝ったという。  
『晉書』卷九十六、「列女傳」王凝之妻謝氏條)

(33) 李清照は食事の後、夫の趙明誠と書齋の歸來堂に坐つて茶を入れ、書物の暗記の勝負によつて、茶を飲む順番を決めたという。(『金石錄後序』)

(34) 「夫子懷珠在櫝、餽口四方。予終歲食貧、黽勉蠶鹽、皆仰給於十指。

……予學慚章母、才愧班姬、加以塵務經心、識見非廣。聊憑臆度、叢雜無章、或篝燈續火、風雨晦明、聽(内閣文庫藏「錦囊冰鑑」「自序」は「課」に作る)稚子琅琅誦讀一過、如晤對古人、庶幾愁苦稍釋耳。諸弟見之、謬加獎與、請付梓人、公諸同好。嗟乎！謝道韞之解圍、無其高朗。李易安之賭茗、乏此清閒。僅同王霸之妻、爲農而沒世。大似老萊之婦、偕隱以灌園。身既隱矣、何用名哉？蓋欲以勸誘童蒙、非敢質諸當世也。」

(35) 「此壬寅早秋、清河諸昆季講仙于修堂。有女仙降壇、自書『姑蘇碧篠』、作詩數首。有問者、亦不甚酬對、但書索蠹窗主人和。予何人、斯乃蒙仙靈見知。讀其詩意、沈鬱悲思、似不得志而沒者。因感其意、謬和五首。他日焚諸壇下、尙求其筆削也。」

(36) 「自念生平淹蹇困塞、無可比數、乃猶有恐予之湮沒無聞而欲彰之者。知己之感、豈可多得。」

(37) 華璋『明清婦女之戲曲創作與批評』(臺灣中央研究院中國文哲研究所二〇〇三年)を参照。

(38) 「蠹窗主人偶於長夏翻閱唐詩、因感黃崇嘏之事。……因歎崇嘏具如此聰明才智、終未竟其業、卒返初服、寧復調朱弄粉、重執巾櫛、向人乞憐乎？故托以神仙、作閨雲高鳥、不受乾坤之拘縛。乃演成一劇、名曰『乾坤圈』。使雅俗共賞、亦足爲娥眉生色、豈不快哉？」

(39) 「予偶閱稗官家所謂『歸蓮夢』者、見其癡情幻境、宛轉纏綿。……借老僧之棒喝、挽倩女之離魂、得證無上菩提、登彼覺岸。于是艾其蕪穢、編爲劇本。名之曰『夢覺關』。」

(40) 『繁華夢』(清乾隆槐慶堂刻本)、第二齣「獨歎」。「生非男子、不能耀祖光宗。身著裙釵、無路揚名顯姓。」

(41) 王元常「繁華夢跋」。「幼稟異質、書史過目即解。每以身列巾幗爲恨。因撰『繁華夢』一劇、以自抒其胸臆。」

(42) 『繁華夢』第廿五齣「仙化」、眉批。「大夢醒後、如癡如醉、不死不活。不得不以仙佛作收科、亦無聊之極思也。」

(43) 曹晉「姚鼐的女德觀與清代桐城婦女風俗」(張宏生編『明清文學與性別研究』、江蘇古籍出版社、二〇〇二年)を参照。